

「臨床心理学演習Ⅰ」の記録・記憶

望月聡

人間学群／心理学類

人間総合科学研究科ヒューマン・ケア専攻講師

(もちづき さとし／神経心理学・認知行動病理学)

演習の位置づけ

私が担当している、人間学類心理学主専攻開講の「臨床心理学演習Ⅰ」を紹介します。この授業は主として人間学類心理学主専攻の3年生が受講しており、ここ数年の受講生は毎年度13名～15名ほどです。

彼らがどういう学生であるかをお伝えするために、はじめに人間学類での学びの道筋をおおまかに説明します。1年生は「心理学Ⅰ・Ⅱ」において、概論的に心理学全般を広く浅く学び、基礎的な知識を得ます。2年生にあがる時点で主専攻が決定され、心理学主専攻に進学すると、「心理学方法論」「心理統計」「心理統計実習」「心理学英書講読」「人間研究の方法(心理学)」などの必修科目によって、研究方法・統計・英語・実習(レポート作成)など、技法的側面が養われます。また、専門科目の講義が始まり、学生はそれぞれの興味関心に従って、より深く知識を獲得します。3年生では専門科目の演習を2科目以上受講し、さらに「心理学研究法」では、数名の小グループに分かれ、イ

ンストラクターの指導のもと、研究計画立案から研究実施・成果発表までの一連の流れを2つの領域にわたって体験します。4年生では学生ひとりひとりが卒業研究を行い、卒業論文を書き上げます。卒業研究では、実験や調査などの結果を踏まえた、実証的な研究論文を仕上げるのが目指されています。

このように学びが進行する途中の3年生に、何をどのように学んでほしいか、また、1年後には卒業研究を行い、卒業論文にまとめなければならない彼らにとって、どのような演習が役立つだろうかなどあれこれ考えたあげく、結果的に「ギャップを埋め」、「あれこれの知識や経験をつなぐ」作業経験をしてもらうのがよいのではないかと思に至りました。

授業の前に、あれこれ考えたこと

- (1) 受講する学生は臨床心理学に関心があり、そのような学生のほとんどは心理療法やカウンセリングなどの介入技法や心

理検査法などに大いに関心を示すだろう。しかし、そのような「いかにも臨床心理」的な方向を追求しすぎると、卒業研究そのものにはつながりにくい。一般の大学生などを対象として実験や質問紙調査などを行う、「アナログスタディ」と称されるスタイルの研究を演習で扱うことにより、卒論のイメージをふくらませてもらえるのではないだろうか。

- (2) もちろん授業の中身は臨床心理学に関連させる。しかし、彼らが他の領域で卒業研究を行うことになったとしても、それなりに有用な内容なり経験にしたい（読む論文の領域を替えれば他でも通用するような、汎用性を持たせた授業にしたいということ）。
- (3) 2年生までの学習をなるべく活かせるようにしたい。専門講義の履修状況が受講生間で異なるので、ある程度「教える」必要があるものの、むしろ方法論、英語、統計で学んできたことを発展させるとか、「教わっていないこと」も主体的に解決できるように仕向けたい。
- (4) 知識増量型の学習から脱却し、問題発見－解決型意識を芽生えさせたい。この時期に並行して履修されている「心理学研究法」とも関連づけたい。
- (5) 3年生のスタート時点で、ほとんどの学生は学術雑誌論文を読んだことがない。

したがって、それまでに学んだ研究法と統計手法の「結びつき」が十分には理解できていない。論文の構成がいかに必然性を持っているのかも理解されていない。とすると、論文の書き方もままならない。英語論文など検索したこともない（検索しようにも、教科書的キーワードではヒットする本数が多すぎてピックアップできず、自らの関心をキーワード化するには専門的な概念を知らなさすぎる）。そういう点を補いたい。無理にでも英語論文を読ませたい。

- (6) 予習を課すとそれにかかる時間は著しくばらつくだろうと予測する。かといって英語を細かく丹念に読みすぎると、「英語の時間」になってしまうし、時間内に読了できない。パラグラフリーディング的にして、速読・多読に意識を向けさせたい。
- (7) もちろん、演習なので、レジュメを作り、それに基づいて発表をするという経験をしてもらい、アカデミックな立ち居振る舞いも養成したい。かみあった質疑応答ができるようになってほしい。
- (8) (これはやや個人的事情) 私がそれまで主として専門としてきた領域とはいささかのギャップが。私自身も学びたい！

授業中：1学期

1学期は、臨床心理学関連のテーマを扱っている日本語で書かれた学術雑誌論文を題材にして、どうやって論文を読むか、論文の構成、研究デザインや統計手法などを、論文を読みながら解説します。特に力点があるのは、研究デザインと統計手法を、実例である研究論文を読みながら結びつけることです。学期前半は実験的研究で、「差をとらえること」(t検定や分散分析など)、学期後半は質問紙調査研究で、「関係をとらえること」(多変量解析、相関、因子分析、重回帰分析、パス解析など)を解説します。

これだけではあまり「臨床心理学」の演習らしくならないので、アナログスタディ御三家(抑うつ傾向、社会不安障害・対人不安傾向、強迫性障害傾向)など、気分障害や不安障害、摂食障害・人格障害などの「傾向」に関する、研究上のスペシフィックな理論やトピックを少しずつ教えます。2・3学期の論文を読むための予習です。

夏休み前には、2・3学期にどの論文を、誰がいつ担当するかを決定する、通称「抽選会」を行います。私の意図は、当然のごとく、夏休みという比較的余裕のある時期に論文を読みはじめてほしいということです(が、これまた当然のごとく、そういう人はほとんどいない)。

論文を各自に探させるのは、本当は大事

かもしれませんが、そもそも先述のように「探せない」、授業としてはテーマが拡散しすぎるおそれがある、そしてたいてい、学生は内容よりも「ページ数の少ない論文を選ぼうとする」傾向がある、などの理由から、論文候補リストを私が用意します。英文学術雑誌2誌から、昨年掲載された論文(つまり、2007年度の授業であれば、2006年に掲載されたもの)のなかで、授業の方向性に沿うものをあらかじめリストアップしておきます。新しい論文を読むことで、先行研究も把握でき、何より毎年演習の内容が必ず変わるということになり、彼らにとっても私にとっても良い効果があります。このリストは1学期最初に配布し、あらかじめ希望を考えさせておきます(このとき候補論文をよく吟味した人は、2・3学期の負担が軽くなるはずなのですが…)。

「授業」中：2・3学期

ひたすら英文学術雑誌論文を読みます。1回1論文、担当学生は1名。2学期には実験系の論文を、3学期には質問紙調査系の論文を読むことにし、両タイプの研究論文に触れます。担当学生は、レジュメと論文そのものを人数分コピーして、当日配布します。論文を当日配布させるのは、先述のとおり、担当学生以外はおそらくほとんど予習しないだろうと思うこと、図表などを用いて説

明するときに、論文があったほうが良いこと、論文に「素早く目を通す」習慣を身につけさせたいこと、などが理由です。

2学期以降は、担当学生がその回の「先生」であって、私はちょっといじわるな質問の多い＝口うるさい「受講生のひとり」になります。当日に論文を配布され、また「先生」の発表（いや、「授業」）を聞いただけではわからないことが多いだろうから、「先生」にガンガンと質問を浴びせかけ、「先生」から教わってほしいのですが、だいたい皆何でもわかってしまう優等生タイプなのか？ 質疑が低調なのは残念です。なお、私も「受講生のひとり」として、「先生」の「授業」を受講すると、なかには大変工夫をした「授業」をしてくれる「先生」がいて、面白いうえに勉強になります。

学会出張や学内委員会諸業務などで、休講にせざるを得ないことがあり、そもそも10名以上履修しているのも、全員が各学期に発表できるわけではありません。発表の当たらない学期には、発表担当者と同じようにレジュメと論文を、学期末に受講生全員に配布するようになっています。こうして、私だけでなく、受講生全員が、「先生」役が回ってこなかった学生のレジュメで学習できるようにし、学年末には全員が、10本ほどの日本語論文と、受講生数×2本の英語論文を経験した勘定になります。

授業の後に、していることなど

このように通年形式で授業を行っていますが、私は、この科目を含め、担当している科目の多くについて、概要をホームページで、また授業日誌的な記録をブログ上で公開しています。かつこよく言えば授業の可視化・透明化を図っていることになるでしょうか。関心を持ってくださった方はご覧ください（せっかくですから、TRIOSなどで検索し、私を探してください）。

実は来年度から、人間学類心理学専攻に在籍する学生も、人間学群心理学類新カリキュラムにベースが移り、授業は学期完結型になります。加えて私は他の科目を担当することとなり、本年度をもって「臨床心理学演習Ⅰ」は終了です。そのような理由で、ここに記したことは、この授業の記録・記憶、という意味合いも含まれます。

最後に、授業評価について。外形的にはしっかりと卒業研究論文を仕上げること、内面的には、卒業研究遂行時、あるいは以降の研究や日常生活において、意味記憶として内容を、エピソード記憶として経験を、手続き的記憶として方法を想起する瞬間があることです。いかがでしょう？